ようこそ！夢の本棚へ

発行所：松居直コレクションプロジェクト
代　表：金戸 美紀子
事務局：石川県小松市
小馬出町10-3
空とこども絵本館
☎ 0761-23-0033
bookrin@city.komatsu.lg.jp

【活動方針】①絵本の楽しさを伝える〈親子読書の奨励〉②絵本の歴史を学び、進むべき方向を考える〈絵本文化の研究〉③市が所有する知的財産として、次世代に正しく伝える〈絵本文化の継承〉

世界に絵本を求めて⑥

～し子どもたちが何十年も読み続けていく本に～

ぜひ紹介したい絵本

◆皆さんにぜひ紹介したいのは、『おおかみと7ひきのこやぎ』というフェリクス・ホフマンさんの本です。ここに扉を持って来てるのに私は感心しました。扉って開けるもんです。ちゃんと開けるものを絵にして、子どもたちが自分の手で開けるってのは、リアリティがありますね◆一番最初にまず、どういう舞台でこの物語が展開するかということが一目で分かるように絵を描いてあるんです。お母さんがすらーっとした姿勢で立ってるのも印象的ですね。「このお母さん、強い人だなあ」ってことが分かります。エプロンがよく似合います。子どもたちは、特色ある姿で走り回っています。で、色がちゃんと描いてありますよね。そして、この家の中で、いろんな事件が起きるわけですから、そういった舞台効果が計算尽くされている◆ここで、お母さんが出かけます。すると、お母さんがクローズアップされて、いいパラソルを持っています。この人の絵本てのは、ヨーロッパの絵描きさんにしては、珍しく〝白〟が多い。あの『ねむりひめ』だとか他の作品絵本でも、ホフマンさんは白をたっぷりと塗りたす技法で挿絵をお描きになるんです◆私は、最初に見た時から印象が深かったものですから、ホフマンさんにお会いした時に「余白ってものをとっても効果的にお使いになってますね」と言ったら、ホフマンさんはニヤッと笑いながら「あの余白の描き方は、中国と日本の絵から学んだんです」とお答えになりました◆中国と日本の絵には、余白というものが見事に活かされてるんです。絵巻を見ても水墨画なんかを見ても、絵を見た人がいろいろ想像できるスペースなんです。

グリム作/フェリクス・ホフマン絵
瀬田貞二訳
１９６７年/福音館書店刊

お子さんのために描いた絵本

◆よく調べたらこの本は、ご自分のお嬢さんのために描いた絵本なんですね。３番目のお嬢さんのスザンヌさんが病気であった時に、病気見舞いにその子の好きな物語を選んで、２年後には、本にする時に描き直されるんです◆ですから、病気で眠っている娘さんのことを考えて、「あなたが帰って来た時に、ちゃんとこうやってベッドでみんな揃って、お母さんが見ていてくれる所で寝られるんだよ」ということを、ホフマンさんは娘さんに語ってるんですね◆そして、２番目のお嬢さんのクリスティーネのために描いたのが『ねむりひめ』です。それから、１番上のお嬢さんのサビーネさんや、一番下に息子さんができた時にも描いてらっしゃいます◆私も一冊、『クリスマスものがたり』という絵本をホフマンさんにお願いをして描いていただいたことがあります。ちょうど出来上がって印刷に回して校正刷りができた時に、実は電報が来て、ホフマンさんが亡くなったということがございました。

フェリクス・ホフマン作
生野幸吉訳
１９７５年/福音館書店刊

絵描きさんがどう読み取るか

◆物語をどれほど絵描きさんが読めるかということが、大きな課題なんですね。翻訳者が物語をよく読めなければ翻訳ができないのと同じように、絵描きさんも物語をほんとに読み取り、物語を自分のものにして、自分の中で繰り返し繰り返しいろいろ想像して、画面構成をしていく◆登場人物や背景をどうするとか、場面の連続性と変化をどうつけるか。「いつ、どこで、だれが、何を、どうして、どうなったか」というのが物語ですから、それを絵でちゃんと表現して行かなくてはいけない。それが絵でちゃんと表現されてるって絵本は、大概子どもたちが、何年も何十年も読み続けていく本になるんです。（つづく）

ほんとに残念で、ホフマンさんの遺作となりました。